

「協働」と「連携」によるまちづくり⑩
 北海道東川町の地域活性化事業

「写真の町」づくりを中心とした

交流事業から定住移住促進を目指す東川町



- 【写真】1 今年度の「全国高等学校写真選手権大会(写真甲子園)」本戦に出場した選手の皆さん
 2 「鉄道がない・国道がない・水道がない」東川町の全景
 3 東川町の区域の一部を占める大雪山国立公園
 4 アーティストックな雰囲気のある街並み
 5 町内の天人峡温泉近くにある「羽衣の滝」は「日本の滝百選」のひとつ
 6 東川町役場壁面には「写真文化首都」の文字が誇らしげに描かれている
 7 「上水道がない」東川町では、美しい地下水を生活用水として活用する。ここは銘水として知られる「大雪旭岳湧水」

1



北海道東川郡東川町は、写真によるまちづくりを行って「写真文化首都」を宣言した町。今回は、そのユニークで先進的なまちづくりを推進する事例をお届けする。

2



本年3月、「写真文化首都」宣言を行う

旭川空港から車で約10分、大雪山を車窓に見ながら走ると、花の植栽で彩られた街並みに入る。通り沿いの商店や飲食店には、木造りのおしゃれな看板がぶら下がり、アーティストックで明るい雰囲気に含まれている。

ここが、日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の区域の一部を占める東川町だ。その町役場の壁面には「写真文化首都」の文字が誇らしげに躍る。プロはもちろんアマチュア写真家・愛好家を含めた写真界の中

3



4



で知らない人はいない「写真の町」なのである。

1985年(昭和60年)、東川町は「写真の町宣言」を行った。

当時、まちおこしのために各市町村では「一村一品運動」が盛んに行われていたが、東川町が打ち出した「二品」は、「写真」。「写真映りのよいまち」を目指そうというものであった。

7



■東川町情報■
 【人口】7,857人(平成26年3月31日現在)
 【面積】247.06平方キロメートル(東西36.1km・南北8.2km)
 【発電所データ】北海道電力(株)新忠別水力発電所
 【本特集問合せ先】東川町役場 企画総務課 企画財政室 ☎0166-82-2111(代)





〔右〕写真文化ギャラリーでは、内外の写真家の作品が常時展示されている
〔左〕本年度の「写真の町東川賞・国内作家賞」を受賞した野口里佳さん

■写真の町東川賞

海外作家賞	1名	賞金100万円
国内作家賞	1名	賞金100万円
新人作家賞	1名	賞金 50万円
特別作家賞	1名	賞金 50万円
飛弾野数右衛門賞	1名	賞金 50万円

「豊かな自然とその中で生きる町を被写体と捉え、この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい」という意味で「写真の町」宣言を行ったのだ。そこから、「写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしよう」という、世界でも類例のない、まちおこしの試みとなった。

宣言の同年に開催されたのが、1ヶ月を会期とする「東川町国際写真フェスティバル」。

その年から毎年開催され、今年で30回を数える。この会期中に発表される「写真の町東川賞」は、「海外作家賞」「国内作家賞」「新人作家賞」「特別作家賞」「飛弾野数右衛門賞」の5



〔上〕「写真甲子園」本戦に出場した選手の撮影
〔中〕「写真甲子園」の公開審査
〔下〕「写真甲子園」の授賞式

大きな反響を呼ぶことになった。

この「写真甲子園」も大きな危機を迎えたことがあった。運営していた企画会社が第12回大会直前に倒産してしまったのだ。急遽、町が中心となって運営しなければならず、役場に

「私たちは、30年にわたって写真文化を通じた潤いと活力のある町づくりに取り組んできました。そのうえで、写真文化と世界の人々をつなぐ役割を担うという決意で、今年、『写真文化首都』の宣言をさせていただきます」

町長の松岡市郎さんは語る。

「私たちは、30年にわたって写真文化を通じた潤いと活力のある町づくりに取り組んできました。そのうえで、写真文化と世界の人々をつなぐ役割を担うという決意で、今年、『写真文化首都』の宣言をさせていただきます」



東川町長
松岡 市郎 さん

「しかし、「写真の町」づくりの道は、簡単ではなかった。

当初、「写真でメシが食えるの？」というのが、多くの町民のいつわらざる心境だった。1991年（平成3年）には、町民の意思によって、とうとう行政は「写真の町」事業を見直すということになってしまふ。

だが、この取り組みは町外で注目されており、特に東京のマスコミや文化人の評価は極めて高かった。小さな地方都市が、写真で自らを世界に発信しようという「心意気」に賛同する人が多かった。そのため、引くに引けない状況に陥ってしまった。

それを大きく打開したのが、1994年（平成6年）の全国高等学校写真選手権大会、通称「写真甲子園」

多くの障害を乗り越えて「写真甲子園」の開催を継続

の開催であった。

全国を8つのブロックに分け、その初戦を勝ち抜いた18校の選手3名と監督1名が、「国際写真フェスティバル」の期間中に開かれる東川町での本戦に招待される。大会は4日間。この期間の中で、選手3人一組で撮影した8枚の組写真でファーストからファイナルまで3回の公開審査を行い、優勝、準優勝、優秀賞を決めるというもの。

撮影場所は今年の場合、東川町、美瑛町、上富良野町、東神楽町、旭川市の指定されたところで、撮影時間、カメラ機材、パソコンなど全て同一条件下で作品づくりが行われる。文化系サークルが体育会的な「選手権」を行うというユニークな試みは



写真文化ギャラリーのある建物。東川賞受賞者をはじめ、内外の写真家のオリジナルプリントを収蔵している



国内外の作家の作品が町内の飲食店にさりげなく掲示されている

「写真甲子園」を含む「東川フォト・フェスタ」という愛称で呼ばれる、この写真フェスティバルの会期は約1ヶ月。8月上旬に設定されたメイン会期では、東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートフォトギャラリー、写真と音楽のコラボレーション

の「トマト収穫体験」などは、こうして出てきた企画だった。開催当初、初戦の参加は163校だったが、第21回を迎えた今年は521校。「東川を目指せ！」というのが全国の高校写真部の合言葉となっている。今年から、タイや台湾からの高校もオープン参加しており、海外にも広がるようになってきた。

町民との出会いが、さらなる感動を生む

かかる負担は相当なものになった。しかし、そのピンチが「写真甲子園」の質を大きく変えることになる。町民のなかに、「町が主催する大会」として積極的にかわる人が出てきて、その中から、新しい企画が次々と生まれた。さらに大きく発展する大会となるチャンスとなったのだ。「町内ホームステイ」、町民の投票によって決める「町民賞」、期間中

ヨンなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われる。夏の1期間、東川町はプロの写真家や映像作家、写真愛好家、高校生、写真キュレーター（学芸員）、写真関連業者、ボランティアなどで満ちあふれる状況となる。大会を支えるボランティアの中には、かつて選手として参加したOB・OGも少なくない。期間中の「出会い」や「感動」が忘れられないのだ。特に町内ホー



写真の町課長
竹部 修司 さん



写真の町課学芸員
吉里 演子 さん

ムステイでの高校生と町民との交流は、「写真の町宣言」にある「出会いの中に感動が生まれます」というものになっている。そうした「写真の町」事業を一手に引き受けているのが「写真の町課」だ。課長の竹部修司さんと3名のスタッフで構成されている。「フォト・フェスタの期間やその前後を除いて、ご協力いただく団体や企業、写真家の先生などを回って日本中を飛び歩いています。ほとんどセールスマンですね」と竹部さんは笑う。なるほど、そのパンフレットに載っている協力・協賛団体は、大手カメラメーカーをはじめ写真関連企業、出版社、大学・専門学校などか

ら航空会社、旅行会社まで幅広い。こうした、「フォト・フェスタ」や「写真甲子園」以外にも、写真関連事業は数多い。年1回、プロの講師を招いて開催する「ワークシヨップ東川写真塾」や、小中学生を対象にした「写真少年団」、町民が参加する年1回の「東川大写真展」、小学校で行う総合学習の時間を活用した「写真授業」などだ。これらは町の写真人口を増やすのがねらいで、東川出身



町内の子どもたちによる「写真少年団」の活動



道の駅「道草館」には寄贈されたクラシックカメラが展示されている



投資事業のひとつある「ECOプロジェクト」の「環境を守る森づくり事業」

これは、町が進める事業を選んで1株1,000円で投資し、目標金額が達成されると町が事業を開始するというもの。町民はもちろん、町外在住の人でも株主になることができ、その場合は、東川町の木工作家による木製写真立てに入れられた「東川町特別町民」の認定証と「株主証」が贈られる。本年度の投資の対象事業は、「写真の町プロジェクト」をはじめ、自然散策路整備やひがしかわワイン事業などの「イ

「写真の町」事業と並んで、注目されているのが、「ひがしかわ株主制度」だ。2008年（平成20年）にスタートした。これは、町が進める事業を選んで1株1,000円で投資し、目標金額が達成されると町が事業を開始するというもの。町民はもちろん、町外在住の人でも株主になることができ、その場合は、東川町の木工作家による木製写真立てに入れられた「東川町特別町民」の認定証と「株主証」が贈られる。本年度の投資の対象事業は、「写真の町プロジェクト」をはじめ、自然散策路整備やひがしかわワイン事業などの「イ

「ふるさと納税」ではなく「ふるさと株主」というコンセプト

の若手写真家の育成も見据えている。写真の町課のスタッフの中で学芸員として働いているのが、大阪出身の吉里演子さん。かつて写真甲子園に出場し、大学を卒業後、大会を主催者の側から支えたいと、町の職員になった。「写

真の町」事業に携わるほか、「写真少年団」の講師も務める。「写真の町」ということで東川に移住して来たプロの写真家も増加しており、「写真の町」東川町の取り組みは、ますます奥深いものとなってきている。



「東川町特別町民」の認定証と「株主証」

エコトプロジェクト」、水と環境を守る森づくりの「ECOプロジェクト」、オリンピック選手を育成する「こどもプロジェクト」の4つ。目標金額が高い「写真の町プロジェクト」以外は投資目標を達成して、既に事業を実施している。株主は、「株主証」を提示すると、町内の加盟している温泉施設や町内の商店などで割引の特典が受けられ、町営の「キトウシ森林公園 家族旅行村ケビン」「大雪遊水ハウス」「小西健二音楽堂」といった宿泊施設などを優待料金で利用できる。さらには1万円（10株）以上投資した株主は、町の「ふるさと交流セ

「ひがしかわ株主制度」における株主（登録者）数と投資額

年	登録者数	投資額
2009年3月末	415件	11,651,000円
2010年3月末	688件	22,645,000円
2011年3月末	919件	29,867,000円
2012年3月末	1,344件	42,142,000円
2013年3月末	2,614件	83,773,000円
2014年7月末	2,900件	91,187,000円

※数字は累計

ンター」に、年6泊まで無料で宿泊が可能だ。このほか、1万円（10株）以上投資した株主のなかの希望者には、その額に応じて最低5,000円相当の東川町の特産品（ひがしかわみやげ）が贈られる。投資額の実績（累計）は、2008年度（平成20年度）の開始当初が約1,165万円、昨年度は約8,377万円、今年度7月現在で、なんと約9,118万に上る。株主の数は2,900人になった。「ひがしかわみやげ」などの額を差引くと、純粋投資額は約7,329万円となる。これらの投資は「ふるさと納税」における寄付として扱われる。そのため、株主は税制優遇制度を受けられる。なのに、東川町では「ふるさと株主」という名称を冠した。この事業の担当者である、企画総務課企画財政室長の吉原敬晴さん（よしかはら）は言う。



「税という言葉は、一般の人々にとって強制力のようなものをイメージします。株主だと、自主的に投資先の事業に参加するという意識も高まるのではないのでしょうか」そこには、「写真の町」事業をはじめとする自らの事業に対する自信と心意気があるようだ。株主の資金提供は、クレジット決済も可能。だが、東川町の特徴は、役場窓口での現金支払いの比率が高いこと、町外の人によるものが多いこと。これは「写真甲子園」などで東川町を訪問した人々が、ついでに株主になるケースが多いことを類



企画総務課 企画財政室長 吉原 敬晴 さん

【上】1万円（10株）以上投資した株主は、年6泊まで無料で宿泊が可能「ふるさと交流センター」
【下】「ふるさと交流センター」のサロンには町内の木工作家によるテーブルが置かれている

「環境を守る
森づくり事業」
の植樹風景



「ひがしかわ株主ファームオーナー」を募集して新鮮な野菜や米をお届けする

推させる。また、毎年資金提供を行うりピーター率が今年の場合、3割を超えることなども大きな特徴だ。

今流行の「ふるさと納税」だが、地方の特産品を安く手に入れられるという、大都市の消費者の「お得感」をくすぐるだけでよいのだろうか。都会の消費者は、「浮気者」が多い。「ふるさと納税」の本来の目的は、持続的な地域の発展を目指す「ファンづくり」にある。そのためには、地域の側に、特産品開発などの事業に対する強い「思い」がなくてはならない。

東川町のこの事業は、単に「ふるさと納税」を「ふるさと株主」と名を変えただけのように見えるが、実はそこには、本質的な違いが隠れているように思える。

交流人口の増加促進から 定住移住人口の増加へ

このように、株主である「特別町民」2,900人と町の人口約7,900人を合わせると、東川の「人口」は1万8000人となる。

交流人口の増加を事業の軸として展開してきた東川町だが、当然、その先には、実質的な定住移住人口の増加促進という目標がある。

2002年(平成14年)の7,576人に対し、12年後の本年8月末現在で7,916人と、340人の人口増加が見られた。木工クラブや家具・写真などの仕事、飲食店、パン屋、雑貨店などを開業した人たちが多い。翌年からは、町で起業する人たちへの支援も行っている。

土地開発公社や民間の分譲宅地も順調な売れ行きを示している。町の分譲地は1993年(平成5年)か



町内の分譲住宅。景観条例を制定して自然と調和する設計基準のもとに建てられている

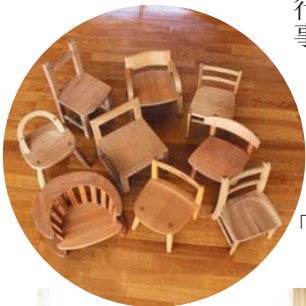
ら造成を始め、昨年までに669区画が販売された。

2003年(平成15年)の「景観条例」の制定後は「東川風住宅」の設計指針を設定している。屋根の勾配や色、外壁の色など、具体的な指針を定めることによって、大雪山の山並みと調和して地域の景観になじむようなものとした。まさに「写真映りのよいまち」を具体化したもの。

また、東川町で「婚姻届」や「出生届」を提出すると、記念品や誕生する子供たちへ「君の椅子」として木工作家による手作りの椅子を贈っている。これも定住促進策のひとつだ。

2008年(平成20年)からは、専門学校などと提携してアジア地域の人々を対象とした「日本語と日本文化体験学校」を開設した。今年度はアジアを中心に、友好姉妹都市交流をしているラトビアなどから、約200名の高校生や大学生が訪れている。町は「町民との交流」が積極的に進められるよう様々な行事で、彼らを迎えている。

また「JETプロگرام」(語学指導等を行う外国青年招致事業)で、語学指導に



「君の椅子」は町内に住む木工作家による作品

東川町で出生すると「君の椅子」が贈られる



従事する外国語指導助手(ALT)や国際交流員(CIR)も7人在住する。

町の交流事業は、国内にとどまらず、海外の人々も「特別町民」になってもらうような取り組みも開始しており、こうした人々と連携したネットワーキングによる観光振興を目指している。

もともと東川は、大雪山の麓で森林業と木工業を中心に、ひっそりとした暮らしを営んでいた町であった。その町が、自らの生存をかけた「写真の町」宣言を行って30年、いまや「世界のHIGHASHIKAWA」となった。その未来に世界中が注目している。